

1. イエスはこれらのことを話し終えられると、弟子たちとともに、ケドロンの川筋の向こう側に出て行かれた。そこに園があって、イエスは弟子たちといっしょに、そこにはいられた。(18:1)
 - a. イエスは弟子たちのために祈られた後、弟子たちと一緒にケドロンの方に渡られた。ケドロンは聖書の中では暗い歴史を持つ。その名前自体も不吉なもので、「暗い」「嘆き」などの意味を持つ。旧約聖書ではダビデがその息子アブシャロムから逃れている時に渡った川で、その逃避行中彼は呪われ石を投げられたりした。ここではイエスがその同じ川を渡り、裏切られるために園に入っていく。
 - b. 偶然かもしれないがイエスはケドロンを渡り園に入られる。創世記ではアダムとイブは人類が墮落した時園の中にいた。もちろん彼らの場合はエデンの園であったわけだが、イエスの場合はケドロンの向かい側にある園であった。
 - c. 人類がパラダイスの中で墮落し、友から裏切られ互いが見放す暗くわびしい場所で人類があがなわれたのは皮肉である。
2. ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た。(18:2-3)
 - a. すべての弟子がイエスを離れペテロは後にイエスを否定するが、イエスを裏切るために使われたのはユダ一人であった。ユダはイエスの12使徒の一人で、12使徒というのはイエスに最も近い弟子として特別に選ばれた者たちであった。ユダは使徒の中でも金銭の管理を任されており、イエスに非常に近かったので裏切りを実行する場所も完全に把握していた。
 - b. この世が終わりに近づくにつれ裏切りの行為はますます一般的になってくる。イエスのご自分のために兄弟、両親、子が互いを裏切り(マタイ 10:21-)、不法がはびこるので多くの人たちの愛は冷たくなる(マタイ 24:12)と預言されている。
 - c. イエスとともに歩む者はいずれ暗い夜や裏切り、あるいはイエスを裏切ろうとする誘惑を乗り越えなくてはならない。これはクリスチャンとして飛躍的に愛の中に成長するか、あるいは無力になってしまうかの分かれ目である。
3. イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、出て来て、「だれを捜すのか。」と彼らに言われた。彼らは、「ナザレ人イエスを。」と答えた。イエスは彼らに「それはわたしです。」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。イエスが彼らに、「それはわたしです。」と言われたとき、彼らはあどすさりし、そして地に倒れた。(18:4-6)
 - a. イエスは裏切り者から身を隠そうとはせず、前に出てご自身を現された。ご自身のことを「それはわたしです」と明らかにされた。このイエスの御名の啓示はまさに敵を地に叩きのめすほどの力がある。(訳者注:「それはわたしです」はギリシャ語の直訳では「わたしは、である("I am...")となり、神の御名を示す。)
 - b. この状況はイエスに不利なように見える。他の弟子たちの頭には「ああ、これで終わりだ」というような考えがよぎっていただろう。しかしイエスはすべてを支配されるすべての主である。その御名はすべての名にまさる。
4. そこで、イエスがもう一度「だれを捜すのか。」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを。」と言った。イエスは答えられた。「それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。」それは、「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした。」とイエスが言われたことばが実現するためであった。(18:7-9)
 - a. イエスはその夜イエス以外の者が捕らえられないようにされた。この大裏切り劇にあってもご自身の弟子を一人も失うことがなかった。「この人たちを去らせなさい」というのはイエスの最後の願いではなく、兵士たちに対する命令であった。
 - b. 数千年前に園の中で失われたものは今や取り戻され、パラダイスの中の不従順によってもたらされた呪いは夜の闇の中の従順によって解き放たれた。